彷徨へる心のまま に 昭 和

干 应 年 歌

る 心

のままに

野は遙か去に 見返りの陵を登ればみかえ し日の一 面か 影げ

簫々の闇 天めのため 斯くある に星の飛ぶなり は 人 と にとけ 八の宿命、 汤 Ś か

> 清が 例かっ 0 玉ま

若き身ので 裏に留い めて

友もがき

の誓が

 $\ddot{\nabla}$

し言葉

斯か

Ž

故に千草ふみ

Ĺ

Ė

月影が

に宿命解かん

と

び

0

詩き

相覧なる 苦べる じみ の旅が がを逝く. に頬を濡ら なり せば

燃え狂ふ情熱 散ち る 知な性が の

焰は

春まるさめ も楡影つたふ

夏

微 毛 風 せ 痛^いま 陽ひ 初な に 夏の野に陽炎たてばっ もしき魂 に咲き出 癒え て幸福は希望は の 疵^き 一づる華 0

光輝なき旧る

じりし仕種は

は

の舞ふ砂丘薄れ

7

忘^{ばうきゃく}

の寄する汐音に

叫ぶには余りに深く 消え去りぬ名残の水際はないないのなどは

には余りに虚し

寥々の孤杖を運ぶ

散り果\ 陵が 三春がとせ を去る Ť 0 つ遊子の瞳 て悲哀を秘め 絢ゥ 夢原も が始林影に

に時は流れ の 新 たな旅出 ぬ

又燃えぬ愛情と決意に

の赤き血粉の赤き血粉の赤き血粉の赤きの赤きの

潮よ

かるから

藤 池 露弘 田 基 君 君 作 作 詇 Ш̈́

伊

汐飛沫浴が 秋深か 小き磯にた

たたず 彼ゕ